

教育実習における学生自己評価と実習校評価の比較考察

塗木 利明

岡山理科大学工学部知能機械工学科

(2010年9月17日受付、2010年11月9日受理)

1. 目的

本学では例年、4年次の5月下旬から7月上旬にかけて3週間（中学校・高等学校教員免許状取得希望者）または2週間（高等学校教員免許状のみの取得希望者）の教育実習が行われている。今年度は中学校で110名、高等学校で85名、計195名の学生が実習を行った。そして、教育実習が終わった直後に行われる総まとめとしての事後指導において、今年度は学生自身による実習自己評価を取り入れてみた。実際に実習校から評価をいただいている評価票と同じ項目の実習評価票に沿った自己評価である。

教育実習中、学生は日々さまざまな指導を受け、その指導に従い活動し、最終的に評価票により評価されることになる。評価は当然、評価する実習校が実習生を現場の職員の一人として評価するのか、学生の実習生として評価するのかで大きく異なり、実習生に何をどこまで期待するかという主観によるものである。しかし、我々大学の教員側が実習指導を行う場合、実習校側の評価を尊重することはもちろん大切ではあるが、学生個々人が実習をどのように受け止めて今後の学習や活動に生かしていくかという観点から行うことも重要である。本稿では、実習校から届いた実習評価票の評価と、学生が実習直後に行った同じ評価項目の自己評価を比較考察し、実習校と学生の実習に対する評価の差異を明らかにし、今後の実習指導の参考にすることを目的とする。

2. 方法

2-1 調査内容

調査には、例年使用している本学独自様式の評価票^{*資料1}を用いた。評価票は、「教科」、「クラス」という2つの大項目があり、「教科」には、指導案・教材研究、授業の展開、授業での生徒指導、事務能力・提出物、教師としての適性の5つの評価項目、「クラス」には、学級会活動、学級での生徒指導、行事・課外活動等、事務能力・提出物、教師としての適性の5つの評価項目がそれぞれ設けられている。そして最後に、総合評価がつけられる構成になっている。

2-2 期間

教育実習は、平成22年5月10日から7月3日までの3週間または2週間にわたって実施された。その後、北海道から沖縄県までのそれぞれの実習校から届けられた教育実習評価票と、6月26日に行われた事後指導の際、学生が行った自己評価を分析の資料とした。

2-3 対象

教育実習を終えた195名のうち、実習校を管轄する市町村教育委員会や実習校が独自に作成した評価項目を用いて評価された学生30名（名古屋市・神戸市・岡山理科大学附属高校など）と事後指導日に実習中などで参加できずに代替の課題を提出した学生3名を除く162名の資料を対象とした。

2-4 分析方法

評価票の評価項目は、AからDまでの4段階で評価されており、これを間隔尺度と考えるとA評価を4、B評価を3、C評価を2、D評価を1と点数化し、また、総合評価は秀評価を5、優評価を4、良評価を3、可評価を2、不可評価を1と点数化して統計処理による分析を行った。

3. 結果と考察

3-1 平均値による比較

表1に実習校の評価票とそれに対応する自己評価の評価項目の平均値と標準偏差が、表2にその平均値を基にして高いほうから低いほうに評価項目を並べた順位表が示されている。

表1 自己評価と評価票の平均と偏差値

評価項目		自己評価(学生)		評価票(実習校)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
教科	指導案・教材研究	3.24	0.60	3.43	0.63
	授業の展開	3.17	0.64	3.32	0.58
	授業での生徒指導	3.24	0.67	3.19	0.66
	事務能力・提出物	3.46	0.61	3.43	0.65
	教師としての適性	3.24	0.62	3.56	0.60
クラス	学級会活動	3.35	0.60	3.41	0.59
	学級での生徒指導	3.22	0.67	3.16	0.64
	行事・課外活動等	3.48	0.64	3.57	0.57
	事務能力・提出物	3.57	0.56	3.51	0.61
	教師としての適性	3.28	0.61	3.59	0.59
総合評価		3.76	0.78	4.00	0.80

表2 自己評価と評価票の評価項目順位表

順位	自己評価(学生)	評価票(実習校)
1	クラス事務能力	クラス教師適性
↑ 2	行事・課外活動等	行事・課外活動等
(平均値高) 3	教科事務能力	教科教師適性
4	学級会活動	クラス事務能力
5	クラス教師適性	指導案・教材研究
6	指導案・教材研究	教科事務能力
7	授業生徒指導	学級会活動
(平均値低) 8	教科教師適性	授業の展開
↓ 9	学級生徒指導	授業生徒指導
10	授業の展開	学級生徒指導

表1によると、10の評価項目のうち学生の自己評価の平均値が実習校の評価の平均をわずかに上回っている項目が4項目ある。その平均値の差は、「学級での生徒指導」と「クラスの事務能力・提出物」が同じで0.06ポイント、そして「授業での生徒指導」0.05ポイント、「教科の事務能力・提出物」が0.03ポイントと続いている。日ごろ講義等で学生と接している経験からすると、生徒指導については、学生が積極的に生徒に関わっていくのではなく、生徒のほうから学生に話しかけてきて、さらにそれが限られた生徒であっても一応対応できたら、指導ができたと過大評価している学生も少なからず存在しているのではないかと思われる。提出物についても昨今、定期考査の答案やレポートで漢字の間違い等、文章作成能力が不足している学生が多く認められることに加え、締切期限に多少遅れても提出さえすれば、できたと判断している学生も多くいるように感じられる。このような学生側の認識の甘さが評価の差になったものと考えられる。そういう意味では実習校の評価3.4～3.5はかなり甘い評価であると思われるが、実習校の指導者のやさしさが垣間見られるところである。

反対に、実習校の平均値が学生の自己評価を上回っている項目は6項目あり、その差は「教科の教師としての適性」が0.32ポイント、続いて「クラスの教師としての適性」が0.31ポイント、「教科の指導案・教材研究」0.19ポイント、「授業の展開」0.13ポイント、「クラスの行事・課外活動等」0.09ポイント、「学級会活動」0.06ポイントである。また、学生の自己評価の項目の中で平均値が一番低いのは「授業の展開」である。実習校からの所見によると「身近なものを使用し、手作り教材を丁寧に仕上げ授業で生かすことができた」、「発問や板書も工夫を重ね、自作のプリント学習を加えたりして、やってみたいと思うことに積極的に挑戦していく姿には熱意を感じた」など努力を認めてもらっている学生もいるものの、全体的にみるとまだまだという認識を持っている学生が多いことがわかる。一方、実習校側で最も低い評価をしているのが「学級での生徒指導」の項目である。実習校からの所見によると、「生徒全員の名前をいち早く覚えるなど積極的にコミュニケーションをとり、生徒との意思疎通を図ることができた」という学生もいる中で「生徒とのかかわりを持つことにやや積極性が不足していた」、「清掃や給食時、生徒の様子を見ているだけで具体的な指導ができていない」などが散見された。また、学生間で「自分に寄ってきた生徒には積極的にかかわった」という会話をしているのを耳にすることがあり、担任の責務としては当然クラス全員への働きかけが必要であるにもかかわらず、配慮が不足している状況からも頷ける結果である。また、総合評価についてみると、学生の自己評価の平均値よりも実習校の評価票の平均値のほうが高く、その差は0.24ポイントで標準偏差の値もかなり高くな

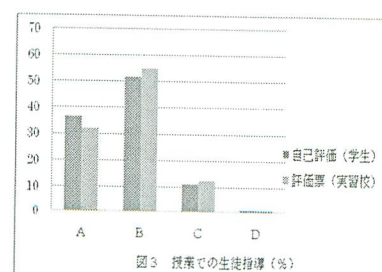
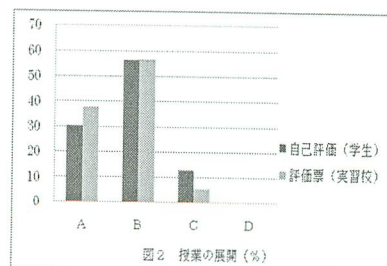
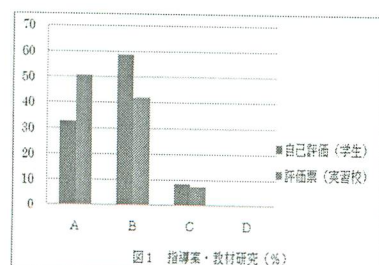
っている。実習校の校種や学年は異なっているが、同種の先行研究の調査結果によると、「全体的な傾向としては、概して学生の自己評価は現場評価よりも高い傾向にある」ことが言われている^{1) 2)}が、本学では以上のように、学生の自己評価よりも実習校の評価のほうが若干高い傾向にあることから、本学の学生たちは自分に厳しく実習に打ち込み謙虚に自己評価する傾向にあることが推測できるのである。

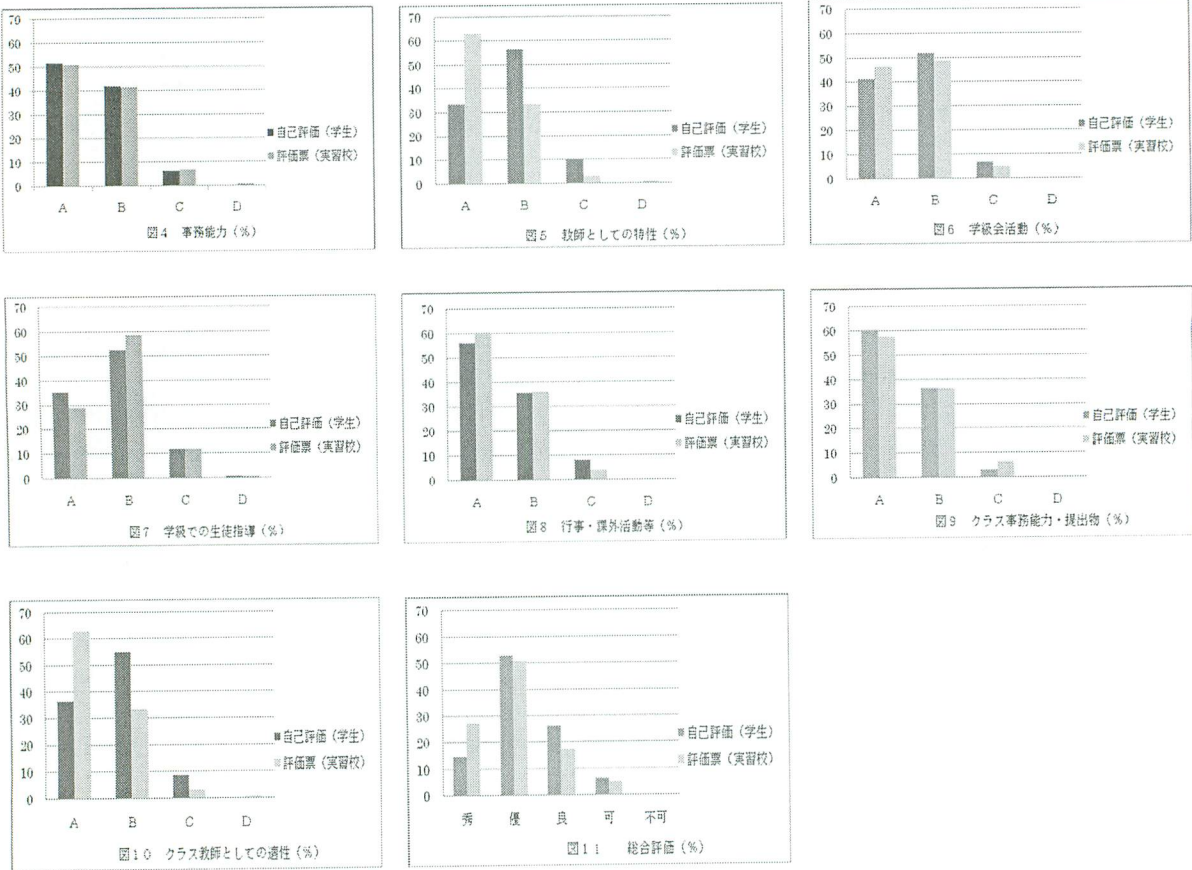
3-2 各評価項目のA評価の比較

表3は学生の自己評価と実習校の評価票の各評価項目に対する評価の割合で、図1.～10.はそれをグラフにしたものである。全体的な傾向は、上記表1の結果と同じであるが、表3から、各評価項目のA評価についてみると、学生の自己評価の割合が実習校の評価票の割合より上回っているのは差の大きい順に、「学級での生徒指導」、「授業での生徒指導」、「クラスの事務能力・提出物」、「教科の事務能力・提出物」の4項目である。反対に、評価票の割合が上回っているのは、「教科の教師としての特性」、「クラスの教師としての適性」、「指導案・教材研究」、「授業の展開」、「学級会活動」、「行事・課外活動等」の6項目である。学生の自己評価と実習校の評価票で顕著な差が認められる項目は、図5.の「クラスの教師としての適性」、次いで図10.の「教科の教師としての適性」、そして図1.の「教科の指導案・教材研究」の3つである。その差は表3から、「教科の教師としての適性」は27.6%、「クラスの教師としての適性」は21.1%、「教科の指導案・教材研究」は17.9%でいずれも評価票のA評価が高くなっている。このように両者の差の大きさにおいて1番と2番を占めたのはいずれも「教師としての適性」についての項目であった。そもそも自分の性格や性質が教師に向いているかどうかという適性判断においては、より客観的な視点が求められるものである。それを学生自身が評価することは非常に難しかったのかもしれない。他の項目が自分自身で出来たか出来なかったかで判断できるものであるのに対し、適性の判定はこの判断基準ではできないからである。従って、このような差が生じたものと考えられる。なお、「教科の指導案・教材研究」の項目に関する差が

表3 各評価項目に対する評価の割合

評価項目		自己評価（学生）				評価票（実習校）			
		A	B	C	D	A	B	C	D
教科	指導案・教材研究	32.7%	58.6%	8.6%	0.0%	50.6%	42.0%	7.4%	0.0%
	授業の展開	30.4%	56.5%	13.0%	0.0%	37.7%	56.8%	5.6%	0.0%
	授業での生徒指導	36.4%	51.9%	11.1%	0.0%	32.1%	54.9%	12.3%	0.6%
	事務能力・提出物	51.9%	42.0%	6.2%	0.0%	50.9%	41.6%	6.8%	0.6%
	教師としての適性	33.5%	56.5%	9.9%	0.0%	61.1%	33.3%	5.6%	0.0%
クラス	学級会活動	41.4%	51.9%	6.8%	0.0%	46.3%	46.8%	4.9%	0.0%
	学級での生徒指導	35.2%	52.5%	11.7%	0.0%	29.0%	58.6%	11.7%	0.6%
	行事・課外活動等	56.2%	35.8%	8.0%	0.0%	60.4%	35.8%	3.8%	0.0%
	事務能力・提出物	60.5%	36.4%	3.1%	0.0%	57.5%	36.3%	6.3%	0.0%
	教師としての適性	36.4%	54.9%	8.6%	0.0%	57.5%	33.3%	3.1%	0.6%





3 番目に高かったことから、大学側としては実習までの指導の過程において、今まで以上に学生に優れた指導案に触れさせ学習させる機会を多く持ち、客観的な判断ができるような力をつけさせることが必要であると思われる。

3-3 総合評価に対する評価の比較

表 4 は、総合評価の割合を示したもので、図 11. はそれをグラフで表したものである。表 4 によると、学生は自己評価で 14.6% が「秀」に値するとしているのに対し、実習校の評価はその約 2 倍の 27.2% が「秀」と評価している。「優」に関してはほとんど差がないものの、「良」は学生の自己評価が 26.1% に対し実習校は 17.3% となっている。「可」はほとんど同じで、「不可」はどちらも 0 である。この結果は、前述の 3-1 と同じ傾向であり、その特徴がより鮮明に表れている。

表 4 総合評価に対する評価の割合

項目	自己評価 (学生)					評価票 (実習校)				
	秀	優	良	可	不可	秀	優	良	可	不可
総合評価	14.6%	52.9%	26.1%	6.4%	0.0%	27.2%	50.6%	17.3%	4.9%	0.0%

3-4 総合評価と評価項目間及び各評価項目間の相関関係

表 5 は学生の自己評価について、表 6 は実習校の評価票について、それぞれ総合評価と評価項目間及び各評価項目間の相関関係を示したものである。以下、一般的な目安³⁾によって、相関関係の強弱を判断して考察してみた。

表 5 の、学生が行った自己評価について各評価項目と総合評価との相関関係を調べたところ、「指導案・

教材研究」、「授業の展開」、「授業での生徒指導」、「教科の教師としての適性」、「学級での生徒指導」、「クラスの教師としての適性」の6項目に5%レベルで有意な相関が見られた。また、各項目間について調べてみると、「授業の展開」の項目と「授業での生徒指導」および「教科の教師としての適性」が、「授業での生徒指導」の項目と「学級での生徒指導」が、「教科の事務能力・提出物」の項目と「クラスの事務能力・提出物」が、「教科の教師としての適性」の項目と「学級での生徒指導」および「クラスの教師としての適性」が、さらに「学級の生徒指導」の項目と「クラスの教師としての適性」の間に弱い相関が見られた。学生が総合評価を検討する際、事務能力・提出物については、特に「クラスの事務能力・提出物」について

表5 総合評価と各項目および各項目間の相関関係（学生の自己評価）

評価項目		教 科					ク ラ ス					総合評価
		指導案	授業展開	授業生指	事務能力	教師適性	学級会	学級生指	行事	事務能力	教師適性	
教科	指導案・教材研究											
	授業の展開	.281*										
	授業での生徒指導	.212*	.417*									
	事務能力・提出物	.190	.085	.201*								
	教師としての適性	.267*	.459*	.380*	.156*							
クラス	学級会活動	.284*	.199*	.317*	.192	.403*						
	学級での生徒指導	.285*	.365*	.520*	.206*	.526*	.316*					
	行事・課外活動等	.214*	.250*	.322*	.227*	.312*	.321*	.342*				
	事務能力・提出物	.124	.088	.094	.577*	.074	.201*	.223*	.352*			
	教師としての適性	.291*	.374*	.398*	.223*	.754*	.394*	.561*	.368*	.131		
総合評価		.422*	.494*	.588*	.313*	.510*	.353*	.552*	.361*	.189	.540*	

*: p < .005

はそれほど重視していないようである。表6の、実習校からの評価票の各評価項目と総合評価との相関関係は、10項目すべて5%レベルで有意な相関が見られた。中でも、特に強い相関は見られなかったものの、「指導案・教材研究」、「教科の教師としての適性」、「学級会活動」、「学級での生徒指導」、「クラスの事務能力・提出物」、「クラスの教師としての適性」の6項目とは普通の相関が、残る「授業の展開」、「授

表6 総合評価と各項目および各項目間の相関関係（実習校の評価票）

評価項目		教 科					ク ラ ス					総合評価
		指導案	授業展開	授業生指	事務能力	教師適性	学級会	学級生指	行事	事務能力	教師適性	
教科	指導案・教材研究											
	授業の展開	.472*										
	授業での生徒指導	.418*	.479*									
	事務能力・提出物	.489*	.329*	.379*								
	教師としての適性	.594*	.524*	.521*	.536*							
クラス	学級会活動	.540*	.525*	.522*	.439*	.455*						
	学級での生徒指導	.459*	.433*	.664*	.388*	.495*	.551*					
	行事・課外活動等	.351*	.350*	.440*	.262*	.429*	.353*	.356*				
	事務能力・提出物	.555*	.353*	.333*	.702*	.509*	.474*	.440*	.287*			
	教師としての適性	.504*	.470*	.535*	.537*	.799*	.555*	.559*	.490*	.546*		
総合評価		.663*	.591*	.596*	.573*	.708*	.633*	.604*	.480*	.617*	.712*	

*: p < .005

業での生徒指導」、「教科の事務能力・提出物」、「行事・課外活動」の4項目とは弱い相関が見られた。さらに、各項目間についても、「授業での生徒指導」の項目と「学級での生徒指導」が、「教科の事務能力・提出物」の項目と「クラスの事務能力・提出物」が、「教科の教師としての適性」の項目と「学級での生徒指導」および「クラスの教師としての適性」の間で普通の相関が見られた。残る項目間にはすべて弱い相関が見られた。

学生の自己評価の相関が見られた項目数や相関係数の大きさと実習校からの評価票のそれとを比較すると、当然ながら実習校のほうが「各項目をまさに総合的に判断して評価している」⁴⁾ことが分かる。つまり、実習校については総合評価が分かれば各評価項目についても同じ傾向が見られるということである。それに対して学生の回答からは、事務能力・提出物を教師の仕事とは別枠で考えている節が窺われる。これらは総合評価の一因となるからというだけではなく、教師の仕事の大切な一部であるという認識を持たせる指導が必要であろう。

3-5 自己評価がすべてA評価の学生の事例

表7は自己評価においてすべての項目についてA評価を行った学生の事例である。今回、実習評価10項目すべてをA評価と自己評価した学生は5名(a~e)であった。2-4でA評価は4と点数化したのでこれらの学生の自己評価の平均値は4.0となる。これと実習校から届いた該当者の評価票の平均値を比較してみる。とらえ方の差異が0.8ポイントと最も大きいのは「授業の展開」の項目(実習校評価3.2)で、続いて0.6ポイントの差があったのは「指導案・教材研究」と「学級での生徒指導」の項目(実習校評価3.4)であった。また、差異が0.2ポイントと最も小さかったのは「教科での事務能力・提出物」、「行事・課外活動等」、「クラスの教師としての適性」の3項目(実習校評価3.8)であった。ところで、表1の全実習生に対する実習校の評価票の平均値と、表7の自己評価がすべてAの実習生の実習校の評価票の平均値を比較してみると、クラスの評価項目5項目は自己評価がすべてAのグループが概ね0.2ポイントほど上回っているが、教科の評価項目については、「授業での生徒指導」、「事務能力・提出物」が0.4ポイント上回っているものの、「指導案・教材研究」および「教師としての適性」の2項目は同じ平均値であり、「授業の展開」の項目に至っては反対に自己評価がすべてAのグループの平均が全体の平均より0.1ポイント低くなっている。自己評価にすべてA評価をつけた学生に実習校がつけた総合評価は、5が2名、4が2名、3が1名、2と1はなく平均すると4.2であり、実習生全体の平均より0.2ポイント高くなっている。10項目のうち8項目で全実習生の平均よりも高い評価を得ている。高い評価が得られるということは、実習がある程度成功していることであり、実習を行っている学生自身も達成感を持っていたのではないだろうか。その結果高い自己評価につながったと思われる。とはいえ、大学で指導する側としては、学生に現実に即した評価ができるような評価力もつけさせる指導が必要である。

表7 自己評価がすべてAの学生の実習校評価票の評価

学生	教 科					ク ラ ス					総合評価
	指導案	授業展開	授業生指	教科事能	教科適性	学級会	学級生指	行事	学級事能	学級適性	
a	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	5
b	3	3	3	3	4	3	3	4	3	4	4
c	3	3	4	4	3	3	4	4	3	3	3
d	3	3	3	4	3	4	3	3	4	4	4
e	4	3	4	4	4	4	3	4	4	4	5
平均	3.40	3.20	3.60	3.80	3.60	3.60	3.40	3.80	3.60	3.80	4.20
標準偏差	0.55	0.45	0.55	0.45	0.55	0.55	0.55	0.45	0.55	0.45	0.84

3-6 実習校の評価票がすべてA評価の学生の事例

表8は実習校の評価票がすべてA評価の学生の事例である。該当の学生は11名(a~k)である。その学生たち自身が最も低く評価している項目は、「学級での生徒指導」で3.00の平均である。次は、「指導案・教材研究」、「授業での生徒指導」でともに3.18である。続いて、教科・クラス共通して「教師としての適性」

で3.27となっている。また、実習校側の評価に最も近い評価をしているのは「授業の展開」と「学級会活動」でともに3.55である。11名の学生の自己評価による総合評価は、5が2名、4が7名、そして3が2名、2と1は0名で平均すると4.0である。標準偏差が最も大きかったのは「学級会活動」で0.69であった。実習校から彼ら11名に届いた評価票の所見の中には、「この実習期間中、さまざまな場面において常に積極的かつ意欲的に活動することができた。生徒に対する熱意ある指導ぶりは、担当した生徒たちに、良き先輩・良き先生として良い影響を与えてくれた。…」 「最初は、少し心配な面もあったが、みるみる成長した。…また、立ち姿にもその成長が見られどんどん教員らしくなってきた。…もう少し伝えたいこともあったが、3週間が短く感じる成長ぶりである。」というものもあった。この11名に共通する評価票の所見でよく出てくるキーワードをまとめると、最も多いのが「積極的・意欲的」（教材研究、授業への取り組み、授業参観、生徒への対応、部活動、清掃活動などに）、次いで「真面目」（実習生の性格、いろいろな対応が、いろいろな取り組みが）、「素直」（性格が、指導の受け止めが）などである。しかし、表8からわかるように、彼らの自己評価は決して高くはない。「事務能力・提出物」や「教師としての適性」にC（2）評価をつけてい

表8 実習校評価票の評価がすべてAの学生の自己評価

学生	教 科					ク ラ ス					総合評価
	指導案	授業展開	授業生指	教科事能	教科適性	学級会	学級生指	行事	学級事能	学級適性	
a	3	3	3	3	3	4	3	3	3	3	3
b	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	5
c	4	3	3	2	3	4	3	2	2	3	4
d	3	4	3	3	4	3	3	3	4	3	4
e	3	3	2	4	2	2	2	3	3	2	3
f	3	4	3	4	3	3	3	3	4	3	4
g	3	3	3	4	4	4	3	4	4	4	4
h	3	4	4	3	4	4	2	4	3	4	4
i	3	3	3	4	3	4	3	3	4	3	4
j	3	4	4	3	3	4	4	4	3	4	5
k	3	4	3	3	3	3	3	4	3	3	4
平均	3.18	3.55	3.18	3.36	3.27	3.55	3.00	3.36	3.36	3.27	4.00
標準偏差	0.40	0.52	0.60	0.67	0.65	0.69	0.63	0.67	0.67	0.65	0.63

たり全体的にもB（3）評価が多かったりする。大学で指導する側としては、もう少し客観的に自分をみつめ自信を持って正當に自己評価できるような評価力もつけさせる指導が必要であると思われる。精神的な健康を害する現場の教員が多くなっている今日、楽観的に自己肯定できる態度の育成も重要と思案するからである。

4. まとめ

学生の教育実習で大切なことは、実習で体得したことをその後の学習へ活かしていくことである。本研究では、本学学生の実習評価と実習校の評価を比較考察し、実習生には何が必要であり、今後学生にどのような指導が必要であるのかを考える参考にしようと試みた。その結果、次のようなことが明らかになった。

- ① 実習校側の教育に対する考え方、とらえ方と学生の考え方、とらえ方に差異がある。
- ② 教育に対する考え方の違いが実習評価に表れている。
- ③ 学生の自己評価よりも実習校の評価のほうがわずかではあるが高い傾向にある。
- ④ 学生が総合的に自己評価を下す際、「事務能力・提出物」の項目については、それほど重視していない。
- ⑤ 実習校からの評価は、総合評価との相関が強く、且つ評価項目間それぞれの結びつきが強い。

本研究を通じて評価の大切さを改めて感じた。実習の講義の中で評価の必要性、本学の実習評価10項目の意味を理解させ、実りある実習になるように指導していきたい。また、今回の実習校からの評価と自己評価のずれを、学生個人が今後の課題として客観的に見出し、認識できるようにするにはどのような方法をとれ

ばよいのか考慮する必要がある。さらに、今後の課題として、学生の実態や変化を知り教育実習指導に活かしていくという観点から、このようなデータを積み重ねていくことが必要であると考えられる。

【注】

- 1) 佐野美奈：保育所実習（保育実習Ⅰ）における実習評価に関する一考察，大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要，7巻，(2008) p66
- 2) 松本 学：教育実習・保育実習における学生自己評価と幼稚園評価・保育所評価の比較考察，国際学院埼玉短期大学研究紀要，28巻，(2007)p143
- 3) 内田 治：EXCELによる統計解析[第2版]、東京図書(2002) p 140によると、相関係数(r)から、相関関係の強弱を判断する目安は、 $0.8 \leq |r| \rightarrow$ 強い相関あり、 $0.6 \leq |r| < 0.8 \rightarrow$ 相関あり、 $0.4 \leq |r| < 0.6 \rightarrow$ 弱い相関あり、 $|r| < 0.4 \rightarrow$ ほとんど相関なし、としている。
- 4) 大塚健樹・吉田恵子・斎藤 修：教育実習保育実習における実習評価と自己評価の比較，盛岡大学短期大学部紀要，第11巻，p22(2001)

【その他参考文献】

- 5) 中原大介：児童福祉施設における自己評価と実習先評価の比較検討，大阪健康福祉短期大学紀要，5巻，pp111-120(2007)
- 6) 石森真由子・小野真喜子：教育実習における実習評価と自己評価の比較，聖和学園短期大学紀要，第43号，pp41-49(2007)
- 7) 石村貞夫・加藤千恵子・劉 晨：EXCELによるアンケート処理、東京図書(2009)
- 8) 東京大学教養学部統計学教室：人文・社会科学の統計学、東京大学出版会(1994)
- 9) 田中 敏・山際勇一郎：ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法、教育出版(1992)
- 10) 竹内 啓/[ほか]：統計学辞典、東洋経済新報社(1989)

教育実習評価票

平成 年 月 日

実 習 校	学 校 名			教 科 担 任	㊦
	校 長	印		ク ラ ス 担 任	㊦
				ク ラ ス 担 任	㊦
実 習 生 (各自で記入)	実 習 教 科	学 生 番 号		氏 名	
出 勤 状 況	実 習 期 間	欠 勤 日 数		遅 刻 ・ 欠 席	
	自 至 月 月 日 日	病 欠 日 日 事 故 欠 日 日		遅 刻 回 回 早 退 回 回	
評 価 項 目		評価 (○で囲む)		特 記 事 項 (顕著な事項があるとき)	
教 科	指導案・教材研究	A B C	D	(実習校の実態に合わせて、左の項目を斜線で取り消したり、新たに追加をしてもよい)	
	授 業 の 展 開	A B C	D		
	授業での生徒指導	A B C	D		
	事務能力・提出物	A B C	D		
	教師としての適性	A B C	D		
ク ラ ス	学 級 会 活 動	A B C	D		
	学級での生徒指導	A B C	D		
	行事・課外活動等	A B C	D		
	事務能力・提出物	A B C	D		
	教師としての適性	A B C	D		
そ の 他		A B C	D		
		A B C	D		
総 合 所 見					総合評価 (○で囲む)
					秀 (90~100)
					優 (80~89)
					良 (70~79)
					可 (60~69)
					不 可 (不 認 定)

※ 実習校へお願い。

大変お手数をお掛けしますが、実習終了後この評価票を切り取って、実習生が別途持参致します返信用封筒に入れてお送り下さい。(ほとんどの中・高校が夏季休暇に入る7月20日までに必着でお願いします)
尚、実習校独自の評価票を使用されても差し支えございません。

A consideration of self-evaluation by students with evaluation by schools in practice teaching

Toshiaki NURUKI

*Department of Intelligent Mechanical Engineering, Faculty of Engineering,
Okayama University of Science,
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

(Received September 17, 2010; accepted November 9, 2010)

What is important in practice teaching by students is to make use of what students have acquired in the following learning. In this research, I've compared self-evaluation by students in our school with that of practice teaching schools. By doing this, I've tried to use it for reference to consider what practice teaching students need and what kind of guidance will be needed. As a result, the following things have been revealed.

- 1) There is a difference between practice teaching schools' views on education and students' ones.
- 2) The difference of views on education can be seen in practice teaching evaluation.
- 3) Evaluation by practice teaching schools tends to be a little higher than that of self-evaluation by students.
- 4) When students examine general evaluation, they don't make a point of paper work ability and submission of reports very much.
- 5) In evaluation by practice teaching schools, we can see close correlation with general evaluation and among each items of evaluation.

Through this research, I've realized the importance of evaluation again. I'd like to make students understand the necessity of evaluation and the meaning of ten items of practice teaching evaluation of our school in the lecture of practice teaching and guide them to fruitful practice teaching. And we have to consider which measures to take to make students themselves find the difference of evaluation objectively and recognize it as the problem in the future. Considering that we have to know the situations and the changes of students and make use of them in the guidance of practice teaching, accumulation of these kinds of data will be needed from now on.